

動詞を非動詞化する記号素について

—— 現在分詞記号素, 過去分詞記号素,
不定詞記号素, ジェロンディフ記号素 ——

川 島 浩 一 郎*

1. はじめに

動詞記号素から動詞記号素としてのステイタスを奪う記号素を, 非動詞化記号素と呼ぶ。

- (1) Pour cela, elle n'utilise que des produits bio *venant* d'Aubergne.
(*Elle*, 7 mars 2005, p.74)
- (2) Tu vois cette étoile solitaire *perdue* dans l'immensité du ciel ? (Guillaume Musso, *Je reviens te chercher*, Collection Pocket, 2008, p.307)
- (3) J'ai beau *chercher*, je ne vois pas. (Fred Vargas, *Ceux qui vont mourir te saluent*, Collection J'ai lu, 1994, p.168)
- (4) Tout *en mangeant*, il consulte les livres qu'il vient d'acheter. (Tonino Benacquista, *Quelqu'un d'autre*, Collection Folio, 2002, p.343)

たとえば (1) の *venant*, (2) の *perdue*, (3) の *chercher*, (4) の *en*

* 福岡大学人文学部教授

mangeant には、動詞記号素だけでなく、非動詞化記号素も含まれている。

本稿では、フランス語の非動詞化記号素として、現在分詞記号素、過去分詞記号素、不定詞記号素、ジェロンディフ記号素の四つがあることを示す。そして、これらの記号素による非動詞化がそれぞれ、どのようなタイプの非動詞化であるかを具体的に検討する。

2. 事実および概念・用語の確認

2.1. 従属の統辞的定義

従属 (subordination) は、表意単位の間に見られる階層性 (hiérarchisation) を示すための概念である。文を構成する表意単位 (記号素や連辞, 連辞素) は、必ずしも互いに同等の統辞ステータスを持っているわけではない。

(5) Elle porte *un tailleur gris clair*, [...]. (*Quelqu'un d'autre*, p.243)

(5) の *un tailleur gris clair* はある色合いのスーツ (*tailleur*) であり, *gris clair* はある色調を帯びた灰色 (*gris*) である。この *un tailleur gris clair* において *tailleur* が中心的であるのに対して, *un* や *gris clair* は周縁的である。また *gris clair* において *gris* が中心的であるのに対して, *clair* は付随的である。第一次分節にはこのような中心性と周縁性, つまり階層性が絶対に必要である。さもなければ言語表現のほとんどが, 記号素の単純な羅列でしかありえなくなってしまふ。たとえば *un tailleur gris clair* の四つの記号素の意味関係は「単一性+スーツ+灰色+明るさ」のような概念の平板な並置から, 想像や連想によって組み立てるしかないことになる。このタイプの伝達手段に限界があることは言うまでもない。

一方が中心的で他方が付随的な統辞関係を, 従属あるいは限定 (*détermina-*

tion) と呼ぶ。より明確に定義すれば、次の三つの条件が満たされるとき、X は Y に従属する (X が Y を限定する) と言われる¹。i) X の出現が Y の存在に依存する。ii) X の付加が Y の統辞的ステイタスに本質的な影響を与えない。iii) 発話の他の部分 (le reste de l'énoncé) に対して X が持つ統辞関係が、Y のそれとは異なる。

(6) Les gamines courent *un grand danger*. (Sylvie Testud, *Gamines*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.14)

たとえば (6) の un と grand は、danger に従属している。(6) における un や grand の出現は、danger の存在に依存する。実際 (6) から danger を消去すれば、それにともなって un や grand も (6) から姿を消す。また un と grand を付け加えることは、(6) における danger の統辞ステイタス (courent の直接目的) に本質的な影響を与えない。そして un や grand と発話の他の部分 (les gamines courent ... danger) との統辞関係が、danger と発話の他の部分 (les gamines courent un grand ...) との統辞関係と異なることは自明である。

また (6) における danger は、un grand danger という連辞の中心部分として、動詞の courent に従属している。(6) から courent を除去すれば、danger はこの文の直接目的であるという存在理由を失うことになる。

(7) Je rentre *sur Paris* aujourd'hui, [...]. (Fred Vargas, *Dans les bois éternels*, Collection J'ai lu, 2006, p.388)

¹ MARTINET (1979) あるいは MARTINET (1985) を参照。

(7) において sur と Paris の間にある統辞関係を、従属とは呼ばない。確かに sur の出現はある意味では Paris の存在に依存しているし、逆に Paris の出現もまた sur に依存している部分がある。しかしこれは単なる依存関係ではなく、sur を付け加えることは、Paris と発話の他の部分との統辞関係に本質的な影響を与える。従属という概念は階層性を明確化するためのものである。その表意単位が存在が他の表意単位のステータスに影響を与えるような事例を、従属と見なすべきではない。

(8) *Jacques, Charles et François sont saufs.* (Marc Levy, *Les enfants de la liberté*, Collection Pocket, 2007, p.293)

(8) において、Jacques, Charles, François の間にある関係も従属ではない。これらは発話の他の部分 (...sont saufs) に対して同じ統辞関係にある。このように発話の他の部分に対して同一の統辞関係を持つものは、従属ではなく等位関係 (coordination) にあると言われる²。等位関係にある諸要素は互いに同じ階層にあるのだから、従属とは別物である。

2.2. 表意単位の「切れ目」

言語単位の抽出には換入 (commutation) という操作が必要不可欠である。概略としては、複数の音・言連鎖 (X, Y, Z と記号化しておく) を、より大きな言連鎖の一点で入れ換えて知的な意味の変化が生じるとき、その位置において X, Y, Z が言語単位 (の実現形) として認定される (たとえば [mwa], [twa], [swa] に見られる [m], [t], [s] の入れ換え)。以下、表意単位について検討しておこう。

² 敦賀 (1998) を参照。

表意単位 (同じく X, Y, Z と記号化する) が成立するためには, 他の表意単位との区別が必要である。表意単位は X であるか Y であるか Z であるか, 複数の可能性があるときに限って, X であることや Y や Z であることに意味がある。仮に色彩に赤色しかなかったとしたら, その色を「赤」と呼ぶことに何か意味があるだろうか。そのような場合には, そもそも「色」という概念すら明確には存在しえないはずである。また, 猫という動物に三毛猫しか存在しないとしたら, 「猫」の指示対象は「三毛猫」のそれに等しいのだから, 「三毛」の部分には実質的な情報がなくなる。 「三毛」という表意単位が意味を持つためには, ペルシャ猫や黒猫や白猫など, 他の「猫の種類」との区別が前提となっていなければならない。

ある文脈における区別の存在は, その文脈で知的な意味の変化をともなう選択 (X, Y, Z の間の入れ換え) が可能であることによって保証される。X か Y か Z かを意図的に選べるということが, X, Y, Z の間に明確な区別があることを根拠づけるからである。

X, Y, Z を互いに異なる表意単位の実現形だと認定できるのは, X, Y, Z をある文脈で入れ換えて, そこに知的な意味が変化が生じたときだけである (必要条件)。この基準に依拠しないかぎり, 表意単位と表意単位の間「切れ目」がどこにあるかを明確に判定する手段はない。たとえば *une jolie fille* の *une* と *jolie* の間に表意単位の「切れ目」があると言えるのは, *la jolie fille* や *une jeune fille* のように, *une* あるいは *jolie* を (ゼロ記号も含めて) 他のものと入れ換えることができ, そこに知的な意味の変化が生じるからに他ならない。もし仮に *une* の出現には必ず *jolie* がともない, *jolie* の出現には必ず *une* がともなうとすれば, *une jolie* は連辞ではなく, 単一の記号素と見なされるはずである。

2.3. 述辞と主辞の統辞的定義

述辞 (prédicat) は、発話の他の部分に従属せず、したがって統辞関係がつくる階層構造の頂点に位置する (2.1. を参照)。これが述辞の、統辞的な定義である³。

(9) Il a *une jolie voix*. (Fred Vargas, *Sans feu ni lieu*, Collection J'ai lu, 1997, p.57)

たとえば (9) において、*une* と *jolie* は *voix* に従属している。(9) から *voix* を消去すれば、それにとまって *une* と *jolie* も姿を消す。また *voix* は (9) において、*une jolie voix* という連辞の中心として、*a* に含まれる動詞記号素に従属する。同様に (9) の *il* も、*a* に含まれる動詞記号素に従属していると言ってよい。動詞記号素がなければ *il* は現れえないからである (*il* は、動詞記号素の存在を必要とする接辞代名詞である)。

これらに対して (9) において *a* に含まれる動詞記号素は、発話の他の部分に従属していない。ここでの (*a* に含まれる) 動詞記号素は、*il* や *une jolie voix* による従属の対象として単に「そこにある」だけなのである。(9) において、発話の他の部分に従属していない (*a* に含まれる) 動詞記号素は、(9) の述辞であるということになる。発話の他の部分に従属していないということは、従属がつくる階層構造の頂点に位置することと同義である。

一方、主辞 (sujet) は、述辞に対する義務的な従属要素として定義される⁴。言い換えれば、述辞が別の表意単位が存在を選択の余地なしに要請するとき、その表意単位が担う統辞機能を主辞と呼ぶ。

³ MARTINET (1979) あるいは MARTINET (1985) を参照。

⁴ MARTINET (1979) あるいは MARTINET (1985) を参照。

- (10) *Gary sait ?* (Katherine Pancol, *Les yeux jaunes des crocodiles*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.415)
- (11) *Pardon ?* (Brigitte Aubert, *Rapports brefs et étranges avec l'ombre d'un ange*, Collection J'ai lu, 2002, p.7)
- (12) *Patience. On a toute la nuit.* (Jean-Christophe Grangé, *La ligne noire*, Collection Le Livre de Poche, 2004, p.245)

たとえば (10) における述辞 (*sait* に含まれる動詞記号素) は、明示的に表明されるかどうかはともかく、別の表意単位の存在を要請している。実際 (10) の *Gary* を他の表意単位と入れ換えることは可能であっても、このような範列関係の存在そのものを除去することはできない。したがって (10) の *Gary* は主辞であるということになる。

主辞は、述辞に対する従属要素である。述辞のない文は (述辞の定義から) 存在しない。しかし、(11) の *pardon* や (12) の *patience* ような主辞を持たない述辞は、少なからず存在する。述辞は主辞がなくても現れうるが、主辞が述辞なしに現れることは (主辞の定義から) ありえない。

- (13) *Il faut partir.* (Guillaume Musso, *L'appel de l'ange*, Collection Pocket, 2011, p.415)

述辞と主辞の定義をまとめておこう。述辞は、発話の他の部分に従属していない表意単位である。主辞は、述辞に対して義務的に従属する表意単位である。このように統辞的に定義すべき存在である主辞は、(13) における *il* のように、意味を持たないこともある⁵。

⁵ 意味を持たないこともある主辞を、意味の観点から定義することは、非常に困難である。

2.4. 記号素あるいは連辞の自律性

記号素あるいは連辞が統辞機能を内在的に含意しているとき、その記号素あるいは連辞は自律的 (autonome) であると言われる⁶。

(14) *Dans chaque roman, Fonelle cherche Félicien.* (Sophie Fontanel, *Fonelle est amoureuse*, Collection J'ai lu, 2004, p.191)

(15) *Ton père vient à Rome ? (Ceux qui vont mourir te saluent, p.22)*

(14) の Félicien が直接目的であることは、Fonelle との相対的な位置関係によって標示される。Félicien や Fonelle 自体に統辞機能が含意されているわけではない。実際 (14) において Félicien と Fonelle の位置を逆にすれば、今度は Fonelle が直接目的となる。(14) の roman や (15) の Rome の統辞機能は、前置詞 (dans や à) によって標示されている。名詞記号素の roman や固有名詞記号素の Rome そのものに、統辞機能が含意されているわけではない。他の記号素あるいは連辞の統辞機能を標示するための記号素 (たとえば前置詞など) は、機能辞 (fonctionnel) と呼ばれる。

(16) *On a vraiment trop bu hier !* (Brigitte Aubert, *Funérarium*, Collection Points, 2002, p.91)

(16) の on には、主辞であるという統辞機能が含意されている。(16) における hier の統辞機能は「位置」によって標示されているわけでも「機能辞」によって標示されているわけでもない。したがって (16) の hier の統辞機能は、いわば消去法的に、hier そのものに含意されていると考えざるをえない。

⁶ MARTINET (1979) あるいは MARTINET (1985) を参照。

(16) における on や hier は、自律的な記号素なのである。

非自律的な Rome に対して、機能辞をともなう à Rome は自律的である。機能辞は、非自律的な記号素・連辞を自律化する記号素なのである。

2.5. 動詞記号素の統辞的定義

フランス語の動詞記号素（人称・時制・法・アスペクトなどを含まない、動詞概念のみの記号素）は、述辞に特化し、主辞機能を要請することのできる記号素である（2.3.を参照）。

(17) Je pense *que* le destin n'*existe* pas. (*Je reviens te chercher*, p.46)

(18) Ils parlent à maman *qui* leur *répond* ! (*Gamines*, p.129)

他の記号素に影響を受けない限り、動詞記号素は述辞としてしか使用できない⁷。たとえば (17) において *existe* が述辞でないのは、それが従属接続詞である *que* をともなっているからである。また (18) の *répond* がこの文の述辞でないのは、それが関係代名詞である *qui* と共起しているからである。他の記号素の助けを借りない限り、*existe* や *répond* に含まれる動詞記号素は述辞としてしか使用することができない。

述辞に特化している動詞記号素は、自律的な記号素でもなければ非自律的な記号素でもない（2.4.を参照）。階層構造の頂点である述辞は、従属の対象として単に「そこのある」だけであって、発話の他の部分に対する統辞機能を標示する必要が、そもそもないからである。

(19) Il n'y a plus de dentifrice. *Zut* ! (Nicole de Buron, *Vas-y maman*,

⁷ MARTINET (1979) あるいは MARTINET (1985) を参照。

Collection J'ai lu, 1978, p.61)

(20) Chut ! (Roald Dahl, *Charlie et la chocolaterie*, Collection Folio Junior, 1964, p.53)

(21) *Merci*, bonne nuit. (Maxime Chattam, *Le sang du temps*, Collection Pocket, 2005, p.102)

述辞に特化した記号素としては、動詞記号素の他に、たとえば (19) の *zut*, (20) の *chut*, (21) の *merci* のような間投詞と *oui*, *si*, *non* がある。ただし、間投詞および *oui*, *si*, *non* は、動詞記号素とは異なり、主辞機能を要請することはできない（あるいは要請する必要がない）。

2.6. 現在分詞記号素・過去分詞記号素・不定詞記号素

(22) の *tombant* は現在分詞、(23) の *tombé* は過去分詞、そして (24) の *tomber* は不定詞と呼ばれる。

(22) *Tombant* sur le lit, elle hésitait entre le rire et les larmes. (Eric-Emmanuel Schmitt, *Odette Toulemonde et autres histoires*, Collection Le Livre de Poche, 2006, p.95)

(23) Les nouvelles de ce parent *tombé* du ciel mirent la famille en joie. (Eric-Emmanuel Schmitt, *La secte des Égoïstes*, Collection Le Livre de Poche, 1994, p.59)

(24) Je finis par *tomber* amoureux. (*Elle*, 4 avril 2005, p.20)

この三つ（現在分詞の *tombant*、現在分詞の *tombé*、不定詞の *tomber*）に、同じ動詞記号素が含まれていることは自明である（2.5.を参照）。逆に言えば、現在分詞、過去分詞、不定詞には共通部分の動詞記号素だけでなく、それぞれ

に固有の表意単位も含まれているはずである⁸。これをそれぞれ、現在分詞記号素、過去分詞記号素、不定詞記号素と呼ぶことにしよう。

要するに、現在分詞は動詞記号素と現在分詞記号素の連辞である。過去分詞は、動詞記号素と過去分詞記号素からなる連辞である。そして不定詞は、動詞記号素と不定詞記号素の連辞である。

(25) *J'ai commandé un autre café.* (Patrice Leconte, *Les Femmes aux cheveux courts*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.119)

(26) *Une Jeep est arrivée dix minutes après son appel.* (Marc Levy, *Le premier jour*, Collection Pocket, 2009, p.36)

(25) の *ai commandé* や (26) の *est arrivée* には複合過去記号素 (完了アスペクト記号素) が含まれる。複合過去記号素は連辞ではなく単一の記号素であるから、そこに過去分詞記号素は含まれない。過去分詞記号素と複合過去記号素は、互いに別物 (同形異義) であると考えるべきである。

2.7. ジェロンディフ記号素

いわゆるジェロンディフは、動詞記号素とジェロンディフ記号素の連辞である (2.5. を参照)。

(27) *Tout en mangeant*, il consulte les livres qu'il vient d'acheter.
(*Quelqu'un d'autre*, p.343)

(28) *Tout en parlant*, il les observait l'une et l'autre. (Jean-Christophe Grangé, *L'Empire des Loups*, Collection Le Livre de Poche, 2003, p.

⁸ 川島 (2012) を参照。

316)

(29) Comment pouvait-elle garder la ligne *en mangeant* autant ? (Guillaume Musso, *La fille de papier*, Collection Pocket, 2010, p.145)

ジェロンディフが直前に *tout* をともなうという文脈を使って検討しよう。たとえば (27) の *tout en mangeant* と (28) の *tout en parlant* に見られるように、この文脈では動詞記号素を入れ換えることができる。また (27) の *tout en mangeant* と (29) の *en mangeant* に見られるように、この文脈では *tout* を除去することができる (ゼロ記号との入れ換えが成立する)。

しかし *tout en mangeant* や *tout en parlant* において、*en* あるいは...*ant* を (ゼロ記号を含めて) 他の表意単位と入れ換えることはできない。この事実は、ジェロンディフにおいて *en* と...*ant* の間に表意単位の「切れ目」がないということ、明瞭に示している (2.2. を参照)。したがって「*en ...ant*」は二つの記号素からなる連辞ではなく、単一の記号素であるということになる。

この「*en ...ant*」をジェロンディフ記号素と呼ぶことにしよう。ジェロンディフ (*en Vant*) は、動詞記号素 (V) とジェロンディフ記号素 (*en ...ant*) の連辞である。

3. 動詞記号素の非動詞化

3.1. 非動詞化の統辞的定義

動詞記号素は統辞的な観点から、次の二つの性質で定義することができる (2.5. を参照)。i) 動詞記号素は、述辞に特化した記号素である。ii) 動詞記号素は、主辞機能を要請できる記号素である。

本稿では、動詞記号素が他の表意単位の影響で、この二つの特性を両方とも失う現象を非動詞化 (*déverbalisation*) と呼ぶことにする。つまり非動詞化さ

れた動詞記号素は、述辞としてしか使えないわけではなく、また主辞機能を持つこともできない。

- (30) C'était un beau sac de cuir, *portant* les initiales : L. C. (Boileau-Narcejac, *Terminus*, Collection Folio, 1980, p.43)

たとえば (30) に見られる *portant* は述辞に特化しているわけではなく、また主辞機能を持つことができない。したがって *portant* に含まれる動詞記号素は、非動詞化されているということになる。

- (31) *Traumatisée*, la nana. (*L'Empire des Loups*, p.348)

- (32) Eux, *mentir* ? (Thierry Jonquet, *Du passé faisons table rase*, Collection Folio, 2006, p.248)

非動詞化された動詞記号素が、(31) の *traumatisée* や (32) の *mentir* のように、述辞の位置に現れる可能性はある。ただし動詞記号素が非動詞化した *traumatisée* や *mentir* は、述辞としてしか使用できないわけではない (4.1. と 4.2. を参照)。つまり、もはや「述辞に特化」しているわけではない。

- (33) Je pense *que vous avez* besoin de repos. (Amélie Nothomb, *Péplum*, Le Livre de Poche, 1996, p.8)

- (34) Je regarde Daphné, *qui me regarde* aussi. (Agnès Abécassis, *Au secours, il veut m'épouser !*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.266)

(33) の *avez* に含まれる動詞記号素は、従属接続詞である *que* の影響によって述辞としてのステイタスを失っている。ただし、そこから主辞機能が失われ

たわけではない（主辞として vous がある）。同様に（34）の regarde に含まれる動詞記号素は、関係代名詞である qui の存在によって述辞としてのステイタスを奪われているが、主辞機能の存在は維持している（主辞として qui がある）。本稿では、これらのような事例を、（30）の portant に見られるような完全な「非動詞化」とは区別する。従属接続詞や関係代名詞による非動詞化は、いわば不完全である。

(35) Lui aussi *a aimé*, c'était il y a longtemps. (*Le premier jour*, p.484)

複合過去記号素は、動詞記号素を非動詞化しない（2.6.を参照）。たとえば、複合過去記号素を含む（35）の *a aimé* は述辞としてしか使用できず、また主辞機能を持つことができる。

3.2. 現在分詞記号素

動詞記号素を非動詞化することのできる記号素を、非動詞化記号素と呼ぶ（3.1.を参照）。現在分詞記号素は（2.6.を参照）、非動詞化記号素の一つである。

(36) De loin, ils avaient l'air de deux collègues se *lavant* les mains.
(Marc Levy, *La première nuit*, Collection Pocket, 2009, p.442)

たとえば *lavant* という現在分詞は、動詞記号素と現在分詞記号素の連辞である。（36）においてそうであるように、*lavant* は述辞に特化しているわけではなく、また主辞機能を要請することもできない。この事実は、*lavant* に含まれる動詞記号素を現在分詞記号素が非動詞化していることを示している。

3.3. 過去分詞記号素

過去分詞記号素は (2.6. を参照), 非動詞化記号素の一つであると考えられる (3.1. を参照).

(37) C'est un succès assuré. (*La ligne noire*, p.449)

たとえば assuré という過去分詞は, 動詞記号素と過去分詞記号素の連辞である. この assuré は, (37) でのように, 述辞に特化しているわけではない. また主辞機能を持つ可能性もない. これらの事実から, assuré に含まれる動詞記号素を, 過去分詞記号素が非動詞化していることは明らかである.

3.4. 不定詞記号素

不定詞記号素は (2.6. を参照), 非動詞化記号素の一つである (3.1. を参照).

(38) Je suis trop jeune pour mourir ! (Guillaume Musso, *Et après...*, Collection Pocket, 2004, p.175)

不定詞である mourir は, 動詞記号素と不定詞記号素の連辞である. この mourir は, (38) に見られるように, 述辞としてしか使用できないわけではない. また mourir は, 主辞機能を持つこともできない. したがって mourir に含まれる動詞記号素を, 不定詞記号素が非動詞化していると考えてよい.

3.5. ジェロンディフ記号素

ジェロンディフ記号素は (2.7. を参照), 非動詞化記号素の一つであると考えられる (3.1. を参照).

(39) *En attendant*, je crois que Juliette est fatiguée. (Fred Vargas, *Debout les morts*, Collection J'ai lu, 1995, p.71)

(40) *En tremblant*, elle déchira l'emballage plastique [...]. (Guillaume Musso, *Sauve-moi*, Collection Pocket, 2005, p.200)

(39) の *en attendant* や (40) の *en tremblant* に見られるように、ジェロンディフは述辞に特化しているわけでも、主辞機能を持ちうるわけでもない。ジェロンディフに含まれる動詞記号素を、ジェロンディフ記号素が非動詞化していることは明らかである。

3.6. まとめ

現在分詞記号素、過去分詞記号素、不定詞記号素、ジェロンディフ記号素との共起は、動詞記号素から次の二つの特性を剥奪する。i) 動詞は、述辞に特化した記号素である。ii) 動詞は、主辞機能を要請できる記号素である。

この事実に着目して、現在分詞記号素、過去分詞記号素、不定詞記号素、ジェロンディフ記号素をまとめて非動詞化記号素と呼ぶ。言い換えれば、現在分詞記号素、過去分詞記号素、不定詞記号素、ジェロンディフ記号素には、非動詞化記号素であるという共通点がある。

4. 非動詞化記号素の多様性

4.1. 現在分詞記号素や過去分詞記号素による動詞記号素の形容詞的な自律化

現在分詞記号素あるいは過去分詞記号素の存在は (3.2. と 3.3. を参照)、動詞記号素を形容詞記号素に、統辞的に接近させる。形容詞記号素に接近させるという点で、動詞記号素を自律化していると言うこともできる (2.4. を参照)。

(41) Le bureau de Sam consistait en une pièce *sobre* *donnant sur le fleuve*. (*Sauve-moi*, p.171)

(42) L'empereur n'aura été qu'une étoile *filante* dans le monde de la cuisine. Un météore *créé par les médias* et qui s'est finalement laissé dévorer par le système [...]. (*L'appel de l'ange*, p.107)

たとえば (41) の *donnant sur le fleuve* や (42) の *créé par les médias* は、付加形容詞である (41) の *sobre* や (42) の *filante* と同様に、名詞記号素に従属している。

(43) *Tremblant de colère*, Nathan explosa soudain. (*Et après...*, p.170)

(44) *Intrigué*, Mark la regarda plus attentivement: [...]. (Guillaume Musso, *Parce que je t'aime*, Collection Pocket, 2007, p.113)

(45) *Curieuse*, Evie se tourna vers Mark [...]. (*Parce que je t'aime*, p.134)

(43) の現在分詞 (*tremblant*) や (44) の過去分詞 (*intrigué*) の統辞機能は、主辞に対する同格であるという点で、形容詞である (45) の *curieuse* の統辞機能に匹敵する。

(46) Je te voyais *bridgeant* chez les Daret, ou... (Françoise Sagan, *Aimez-vous Brahms...*, Collection Pocket, 1959, p.58)

(47) Je voyais Gaspard, dans sa retraite hautaine, *occupé* à écrire cette métaphysique... [...]. (*La secte des Égoïstes*, p.93)

(48) Lombard est drôle, [...]. Je l'ai vu très *amusant*. (Françoise Sagan, *Bonjour tristesse*, Collection Le Livre de Poche, 1954, p.21)

(46) の *brigeant* や (47) の *occupé* の分布は、直接目的に対する属詞であるという点で (48) の *amusant* の分布にはほぼ等しい。(48) の *très* をともなう *amusant* は、形容詞であると考えてよい。

現在分詞記号素と過去分詞記号素の分布は、いつも対称的であるわけではない。

(49) Chaque acteur est *payé* cinq cents francs la journée. (Tonino Benacquista, *Saga*, Collection Folio, 1997, p.82)

(50) Je suis *attendu* par le Dr Morales, [...]. (*L'appel de l'ange*, p.206)

(51) Le chantage est sévèrement *puni* par la loi, [...]. (*Et après...*, p.316)

たとえば (49) の *payé*, (50) の *attendu*, (51) の *puni* のように、過去分詞記号素によって非動詞化された動詞記号素 (つまり過去分詞) は、繫辞と結び付くことができる。

これに対して、現在分詞記号素と共起する動詞記号素 (つまり現在分詞) は、繫辞と結び付くことができない。

(52) Il ne sera pas trop *regardant*. (*Les yeux jaunes des crocodiles*, p.424)

(53) Qu'est-ce qui est *dégoûtant* ? (*Bonjour tristesse*, p.41)

(54) Tu fais peur, tu es *effrayant*. (Arnaud Desplechin, *Comment je me suis disputé... (ma vie sexuelle)*, Hachette, 1996, p.164)

(55) Mickey, lui, est *partant* pour une belote, [...]. (Sébastien Japrisot, *L'été meurtrier*, Collection Folio, 1977, p.118)

(52) の *regardant*, (53) の *dégoûtant*, (54) の *effrayant*, (55) の *partant* は、どれも現在分詞ではなく形容詞である。実際、これらの *regardant*,

dégoûtant, effrayant は目的辞機能を受入れることができない (現在分詞であれば可能)。 (55) の partant は, 主辞の性・数によって形態が変化する。

4.2. 不定詞記号素による非動詞化の無標性

不定詞記号素は (3.4. を参照), 動詞記号素を単に非動詞化するだけの記号素である。

- (56) *Penser* rend triste ; [...]. (Frédéric Beigbeder, *L'amour dure trois ans*, Collection Folio, 1997, p.15)
- (57) *L'idée qu'il soit loin* la rend infiniment triste. (Agathe Hochberg, *Mes amies, mes amours, mais encore ?*, Collection Pocket, 2005, p. 199)
- (58) J'aime *donner mon avis sur tout*. (*Debout les morts*, pp.40 – 41)
- (59) [...], j'aime beaucoup *les animaux*. (*Funérarium*, p.20)
- (60) Il faut *essayer*. (*Terminus*, p.65)
- (61) [...], et pour construire quelque chose de cohérent il faut *un plan*. (*La première nuit*, p.455)
- (62) J'ai envie de *revoir Bianca*. (Tonino Benacquista, *La commedia des ratés*, Collection Folio, 1991, p.118)
- (63) J'ai envie de *changement*, en ce moment. (*Au secours, il veut m'épouser !*, p.66)
- (64) Il a besoin de *réfléchir*. (*Ceux qui vont mourir te saluent*, p.118)
- (65) Il avait besoin d'*air*. (*Sauve-moi*, p.252)

動詞記号素と不定詞記号素の連辞 (つまり不定詞) は, (56) の penser, (58) の donner..., (60) の essayer, (62) の revoir..., (64) の réfléchir のよう

に、名詞（句）と同じ位置に現れることがある。名詞（句）と同じ分布であるという点では、これらの不定詞は、統辞的に名詞句に相当すると言えることができる。

しかし不定詞（動詞記号素と不定詞記号素の連辞）は、名詞（句）が現れないような位置に現れることもある。

(66) Il a beau *sourire*, son discours manque de conviction. (Serge Brusolo, *La fenêtre jaune*, Collection Le Livre de Poche, 2007, p.16)

(67) Je suis retourné au café *boire* une autre bière. (*L'été meurtrier*, p. 51)

(68) Il n'y a pas à *hésiter*. (Bernard Werber, *Les fourmis*, Collection Le Livre de Poche, 1991, p.38)

たとえば (66) の *sourire*, (67) の *boire...*, (68) の *hésiter* はどれも、名詞（句）と入れ換えることができない。したがって、これらの不定詞を名詞（句）に相当すると判定する根拠はない。

不定詞記号素によって非動詞化された動詞記号素は、名詞（句）に相当することもあれば、そうでないこともある。この事実は、不定詞記号素の存在によって、動詞記号素に特定の統辞特性が生じるわけではないことを明瞭に示している。

(69) Il sentait ses mains *trembler*. (*Debout les morts*, p.182)

(70) Mais je sentais Keira *inquiète* [...]. (*Le premier jour*, p.344)

(71) Je voyais pas Trevor Hamilton *avoir* des amis et *passer* ses nuits à danser, [...]. (Maxime Chattam, *Maléfices*, Collection Pocket, 2004, p.429)

(72) Je ne te vois pas *travaillant* dans un atelier ou sur des échafaudages. (Georges Simenon, *Le Petit Saint*, Collection Le Livre de Poche, 1964, p.130)

(73) Keira avait interrompu sa lecture, inquiète de me voir si *troublé*.
(*La première nuit*, p.297)

(69) の *trembler* と (70) の *inquiète*, あるいは (71) の *avoir... et passer...* と (72) の *travaillant* および (73) の *troublé* に見られるように, 不定詞記号素と動詞記号素の連辞は, 形容詞, 現在分詞, 過去分詞と同じ分布に現れることもある. 分布から判断すれば, (69) の *trembler* や (71) の *avoir... et passer...* には形容詞的な側面があると言えることができる.

(74) Je suis venu *boire un café*. (Anna Gavaldà, *Ensemble, c'est tout*, Collection J'ai lu, 2004, p.471)

(75) Je suis venu *pour te dire la vérité*. (Marc Levy, *La prochaine fois*, Collection Pocket, 2004, p.190)

(74) の *boire...* の統辞機能は, (75) の *pour te dire...* に匹敵する. この事実からは (74) の *boire...* を副詞的だと考えることも可能である.

不定詞記号素の存在によって, 動詞記号素に特定の統辞特性が生じるわけではない. 不定詞記号素と動詞記号素の連辞 (不定詞) は, 非自律的な連辞である. 不定詞記号素は動詞記号素を, 単に非動詞化させるだけなのである.

4.3. ジェロンディフ記号素による動詞記号素の非形容詞的な自律化

ジェロンディフ記号素と動詞記号素の連辞 (つまりジェロンディフ) は自律的な連辞である. つまりジェロンディフ記号素は, 動詞記号素を自律化する

(2.4. を参照).

(76) Il pleurait presque, *tout en parlant*. (Boileau-Narcejac, *Sueurs froides*, Collection Folio, 1958, p.117)

(77) *En parlant* de mère abusive, tu ne connais pas ma tante Angèle ?
(Agnès Abécassis, *Chouette, une ride !*, Collection Le Livre de Poche, 2009, p.106)

たとえば (76) の *en parlant* は, *pleurait* に含まれる動詞記号素に従属している。(77) の *en parlant...* は文副詞的であると言われる。これらの統辞機能は「位置」によって示されているわけでも「機能辞」によって示されているわけでもない (*en* はジェロンディフ記号素の一部分)。

ジェロンディフ記号素と動詞記号素の連辞は, 名詞記号素に従属することも, 属詞の位置に現れることもできない。つまり, 現在分詞記号素や過去分詞記号素の場合とは違って (4.1. を参照), ジェロンディフ記号素は動詞記号素を形容詞記号素に接近させるわけではない。

4.4. まとめ

現在分詞記号素や過去分詞記号素は, 動詞記号素を形容詞的に自律化する。ただし, 現在分詞記号素と過去分詞記号素の分布がいつも対称的であるわけではない。不定詞記号素は, 動詞記号素を自律化しない。不定詞記号素は動詞記号素を, 単に非動詞化するだけである。そしてジェロンディフ記号素は, 動詞記号素を非形容詞的に自律化する。

5. まとめ

動詞記号素から次の二つの性質を剥奪する記号素を、非動詞化記号素と呼ぶ。

i) 動詞記号素は、述辞に特化した記号素である。 ii) 動詞記号素は、主辞機能を要請できる記号素である。

つまり非動詞化された動詞記号素は、述辞としてしか使えないわけではなく、また主辞機能を持つこともできない。

(78) Les enfants *vivant* dans les villes sont au courant de la mode. (*Elle*, 30 mai 2005, p.39)

(79) Où est le Matisse *acheté* en 53 ? (Tonino Benacquista, *Trois carrés rouges sur fond noir*, Collection Folio, 1990, p.59)

(80) Puis je suis remonté *m'habiller*. (Marc Levy, *Le voleur d'ombres*, Collection Pocket, 2010, p.77)

(81) Tout *en remontant* Kearney Street, le tacot retrouva un semblant de stabilité. (*L'appel de l'ange*, p.35)

フランス語の非動詞化記号素としては、たとえば、(78) の *vivant* に含まれる現在分詞記号素、(79) の *acheté* に含まれる過去分詞記号素、(80) の *habiller* に含まれる不定詞記号素そして (81) の *en remontant* に含まれるジェロンディフ記号素がある。

現在分詞記号素や過去分詞記号素は、動詞記号素を形容詞的に自律化する。ただし、現在分詞記号素と過去分詞記号素の分布がいつも同一であるわけではない。ジェロンディフ記号素は、動詞記号素を非形容詞的に自律化する。そして不定詞記号素は、動詞記号素を自律化しない。不定詞記号素は動詞記号素を、単に非動詞化するだけである。不定詞記号素は、いわば無標の非動詞化記号素

である。

[参考文献]

川島浩一郎 (2012) 「助動詞の定義と Pouvoir」『福岡大学研究部論集』A11-4, 39-48.

MARTINET, André (1979), *Grammaire fonctionnelle du français*, Paris, Didier.

MARTINET, André (1985), *Syntaxe générale*, Paris, Armand Colin.

敦賀陽一郎 (1998) 「等位接続と統辞機能」『フランス語を考える フランス語学の諸問題 II』, 東京, 三修社, 204-215.

渡邊淳也 (2011) 「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究言語篇』60, 筑波大学, 121-181.